

※※2011年1月改訂(第3版)
 ※2009年6月改訂(第2版)

鎮 痙 剤

※劇 薬

パパベリン塩酸塩「ヨシダ」

日本標準商品分類番号

871243

日本薬局方

パパベリン塩酸塩 Papaverine Hydrochloride

承認番号	21900AMX01792000
薬価収載	2008年1月
販売開始	2008年1月
再評価結果	1999年6月

貯 法：遮光した気密容器、
室温保存
使用期限：ラベル等に記載

【禁 忌(次の患者には投与しないこと)】

本剤に対し過敏症の既往歴のある患者

【組成・性状】

1. 組 成

本剤1g中、日局パパベリン塩酸塩1gを含む。

※※ 2. 製剤の性状

本剤は白色の結晶又は結晶性の粉末である。

本剤は水又は酢酸(100)にやや溶けにくく、エタノール(95)に溶けにくく、無水酢酸又はジエチルエーテルにほとんど溶けない。

本品1.0gを水50mLに溶かした液のpHは3.0~4.0である。

【効能・効果】

下記疾患に伴う内臓平滑筋の痙攣症状

胃炎、胆道(胆管・胆のう)系疾患

急性動脈塞栓、末梢循環障害、冠循環障害における血管拡張と症状の改善

【用法・用量】

パパベリン塩酸塩として、通常、成人1日200mgを3~4回に分経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

【使用上の注意】

1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)

緑内障の患者〔眼圧上昇作用により、緑内障を悪化させるおそれがある。〕

2. 相互作用

併用注意(併用に注意すること)

薬剤名	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
レボドパ	レボドパの作用が減弱するおそれがある。	機序不明

3. 副作用

本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

種類\頻度	頻 度 不 明
肝 臓 ^{注1)}	アレルギー性肝障害
過 敏 症 ^{注2)}	発疹等
循 環 器	心悸亢進、血圧上昇等
精神神経系	めまい、眠気、頭痛等
消 化 器	便秘、口渇、食欲不振、心窩部痛等
そ の 他	顔面潮紅、発汗

注1) 観察を十分に行い、このような症状があらわれた場合には、投与を中止すること。

注2) このような場合には、投与を中止すること。

4. 高齢者への投与

一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。

5. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与

妊娠中の投与に関する安全性は確立していない(使用経験が少ない)。

6. 小児等への投与

小児等に対する安全性は確立していない(使用経験が少ない)。

【薬物動態】

パパベリンは消化管からの吸収は比較的速く、生物学的半減期はヒトで経口投与時には1~2時間であり、個人差が大きい。血中たん白結合率は、約90%である。ヒトでは肝で主に代謝され、パパベリンの4位の脱メチル化が選択的に起こり、投与量の40%が4-ヒドロキシパパベリンのグルクロナイドとして尿中に排泄される。

【薬効薬理】

各種平滑筋に直接作用し、それらの収縮を非競合的に抑制する。その結果、血管拡張による血流増加作用や内臓平滑筋に対する鎮痙作用が現れる。その機序としては、(1)ホスホジエステラーゼの阻害による細胞内cyclic AMPの増加や(2)Ca²⁺の細胞内への流入抑制、(3)酸化的リン酸化の抑制によるATP産生能の低下、などが考えられている。

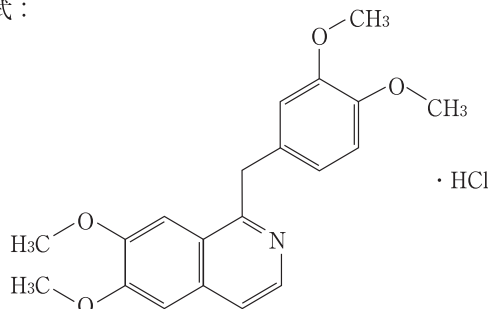
※※【有効成分に関する理化学的知見】

一般名：パパベリン塩酸塩

化学名：6,7-Dimethoxy-1-(3,4-dimethoxybenzyl)isoquinoline monohydrochloride

分子式：C₂₀H₂₁NO₄ · HCl

構造式：



分子量：375.85

※※【包 装】

500g

※※【主要文献】

- 1) 日本公定書協会：第15改正 日本薬局方解説書 C-3101 広川書店(2006)
- 2) 栗秋 要：薬の原理とその応用 118~9、274~5 中外医学社(1954)
- 3) グッドマン・ギルマン薬理書 948 広川書店(1977)
- 4) G.Wilen, P.Ylitalo : Metabolism of [¹⁴C] papaverine in man J. Pharm. Pharmacol. 34(4) 264~6(1982)

【文献請求先】

吉田製薬株式会社 学術部

〒164-0011 東京都中野区中央5-1-10

TEL 03-3381-2004

FAX 03-3381-7728

製造販売元



吉田製薬株式会社

埼玉県狭山市南入曽951